

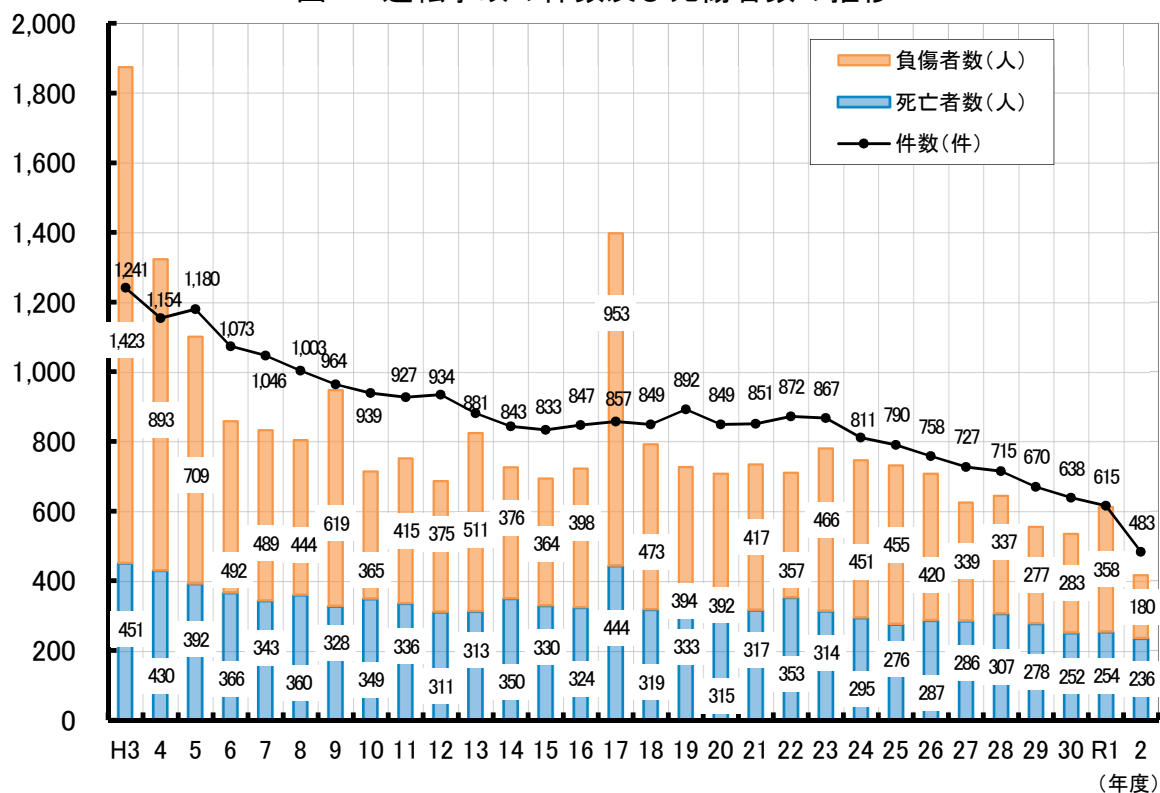
2 運転事故に関する事項

2.1 鉄軌道における運転事故の発生状況等

(1) 運転事故の件数及び死傷者数の推移

- ・運転事故の件数⁷ は、長期的には減少傾向にあり、平成29年度から600件台で推移していましたが、令和2年度は483件(対前年度比132件減)でした。
- ・令和2年度に発生した運転事故による死傷者数⁸ は、416人(対前年度比196人減)でした。運転事故による死傷者数は運転事故件数と同様、長期的には減少傾向にありますが、JR西日本福知山線列車脱線事故が発生した平成17年度の死傷者数が1,397人であるなど、甚大な人的被害を生じた運転事故が発生した年度では死傷者数が多くなっています。
- ・なお、令和2年度に発生した運転事故による死亡者数⁶ は、236人(対前年度比18人減)でした。

図5： 運転事故の件数及び死傷者数の推移



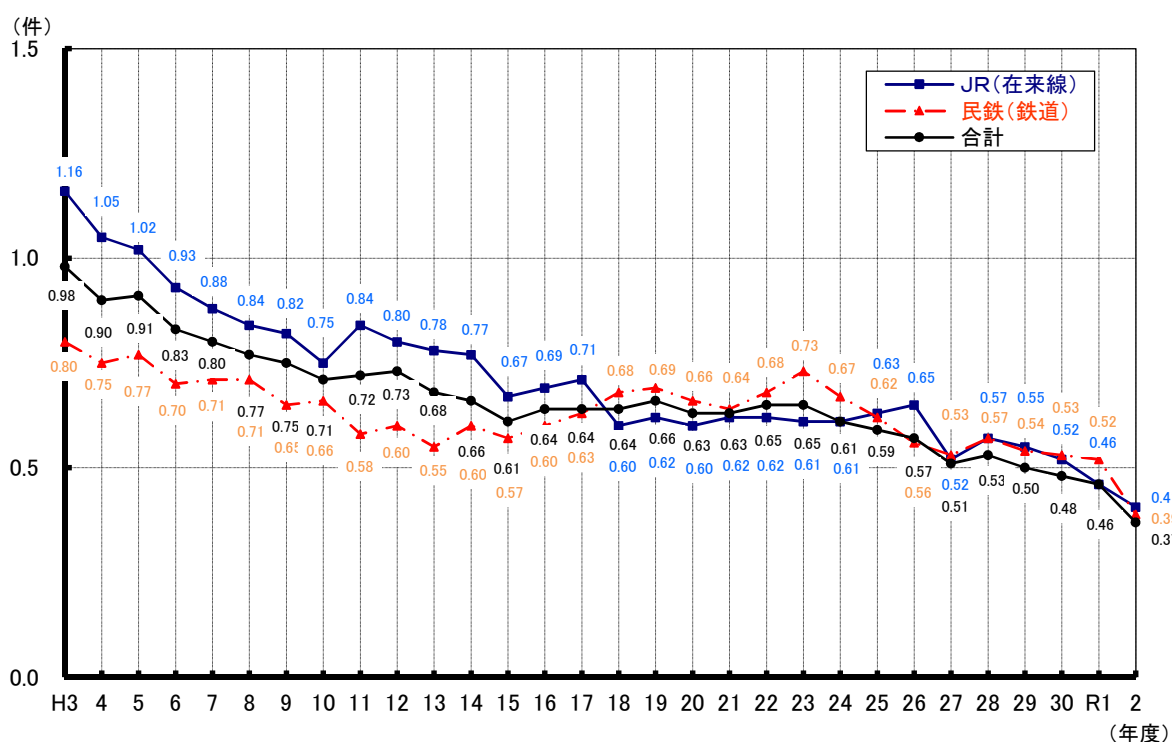
⁷ 踏切障害事故、道路障害事故及び人身障害事故にあっては、自殺によるものは、運転事故として扱わないこととしています(自殺と断定できないものについては、運転事故としています)。

⁸ 自殺の行為に直接的に巻き込まれたことにより第三者が死傷した場合についても、同様に死傷者数には含めないこととしています。

(2) 列車走行百万キロ当たりの運転事故の件数の推移

- ・列車走行百万キロ当たりの運転事故の件数は、運転事故の件数と同様に長期的には減少傾向にあり、平成25年度から平成29年度までは0.5件台で推移していましたが、令和2年度は0.37件でした。

図6：列車走行百万キロ当たりの運転事故の件数の推移



※ グラフ中の「合計」は、JR(在来線+新幹線)と民鉄等(鉄道+軌道)の合計です。

(3) 運転事故の種類別の件数及び死傷者数

- ・令和2年度に発生した運転事故の件数は、(1)に記述したとおり483件であり、その内訳は、線路内やホーム上での列車との接触などの人身障害事故が283件(運転事故に占める割合58.6%、対前年度比68件減)、踏切道における列車と自動車との衝突などの踏切障害事故が165件(同34.2%、同43件減)、路面電車と自動車等が道路上で接触するなどの道路障害事故が25件(同5.2%、同13件減)、列車事故は9件(同1.9%、同6件減)、物損事故は1件(同0.2%、同2件減)でした。
- ・令和2年度に発生した運転事故のうち、身体障害者が関わる事故の件数は4件(対前年度比3件減)であり、人身障害事故が3件、踏切障害事故が1件(視覚障害者が3件、下肢障害者が1件関わる事故)でした。
- ・新幹線に関わる運転事故はありませんでした。
- ・令和2年度に発生した運転事故による死傷者数は、(1)に記述したとおり416人であり、その内訳は、人身障害事故によるものが285人(運転事故に占める割合68.5%、対前年度比84人減)、踏切障害事故によるものが117人(同28.1%、同18人減)、道路障害事故によるものが8人(同1.9%、同9人減)、列車事故によるものが6人(同1.4%、同85人減)でした。
- ・なお、令和2年度に発生した運転事故による死亡者数は、(1)に記述したとおり236人であり、その内訳は、人身障害事故によるものが161人(運転事故に占める割合68.2%、対前年度比8人減)、踏切障害事故によるものが74人(同31.4%、同8人減)、道路障害事故によるものが1人(同0.4%、同増減無し)、列車事故によるものが0人(同0%、同2人減)でした。

表2: 運転事故の件数及び死傷者数(令和2年度)

	件 数 (対前年度)	死傷者数 ^{※3} (対前年度)	うち死亡者数 (対前年度)
列 車 事 故	9 件 (△ 6 件)	6 人 (△ 85 人)	0 人 (△ 2 人)
うち列車衝突事故	3 件 (+ 1 件)	4 人 (△ 2 人)	0 人 (± 0 人)
うち列車脱線事故	6 件 (△ 7 件)	2 人 (△ 83 人)	0 人 (△ 2 人)
うち列車火災事故	0 件 (± 0 件)	0 人 (± 0 人)	0 人 (± 0 人)
踏 切 事 故 ^{※1}	165 件 (△46 件)	117 人 (△ 99 人)	74 人 (△10 人)
うち踏切障害に伴う ^{※2} 列車事故	0 件 (△ 3 件)	0 人 (△ 81 人)	0 人 (△ 2 人)
うち踏切障害事故	165 件 (△43 件)	117 人 (△ 18 人)	74 人 (△ 8 人)
道 路 障 害 事 故	25 件 (△13 件)	8 人 (△ 9 人)	1 人 (± 0 人)
人 身 障 害 事 故	283 件 (△68 件)	285 人 (△ 84 人)	161 人 (△ 8 人)
うち線路内立入り等による列車との接触	181 件 (+ 1 件)	183 人 (+ 1 人)	143 人 (+ 9 人)
うちホームでの列車との接触	98 件 (△62 件)	98 人 (△ 62 人)	17 人 (△17 人)
物 損 事 故	1 件 (△ 2 件)		
合 計	483 件 (△132 件)	416 人 (△196 人)	236 人 (△18 人)

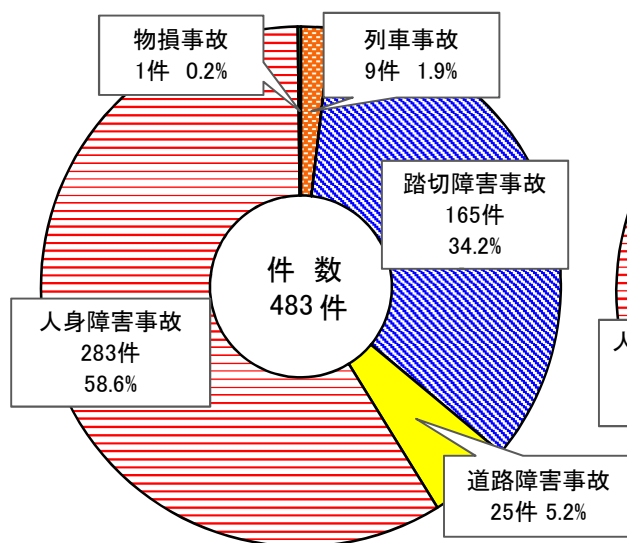
※1 「踏切事故」とは、踏切障害に伴う列車事故及び踏切障害事故をいいます。

※2 「踏切障害に伴う列車事故」の件数等は、踏切事故の内数であり、列車事故にも重複して計上されています。合計の件数等は、この重複を除いたものです。

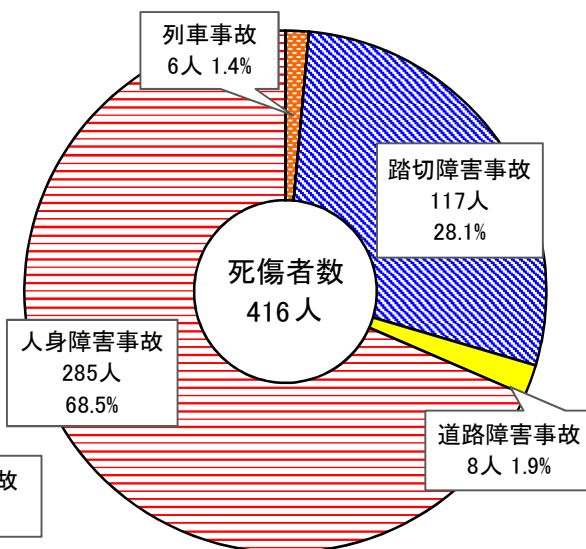
※3 踏切障害事故、道路障害事故及び人身障害事故にあっては、自殺によるものは、運転事故として扱わないこととしています(自殺と断定できないものについては、運転事故としています)。また、列車事故にあっては、自殺によるものも運転事故として扱いますが、死傷者数には自殺によるものは含めないこととしています。なお、自殺の行為に直接的に巻き込まれたことにより第三者が死傷した場合についても、同様に死傷者数には含めないこととしています。

図7： 運転事故の種類別の件数及び死傷者数（令和2年度）

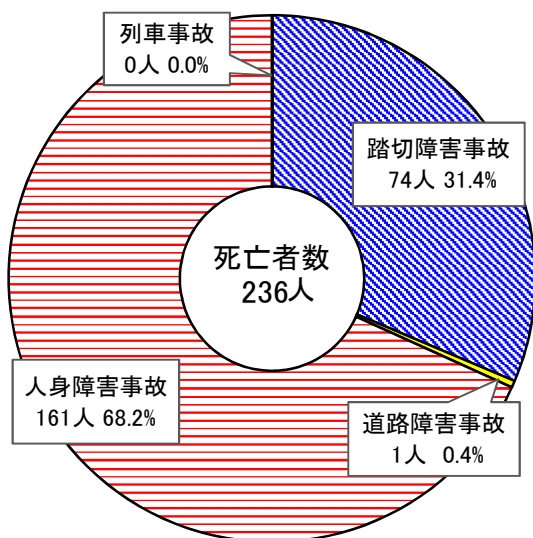
① 件 数



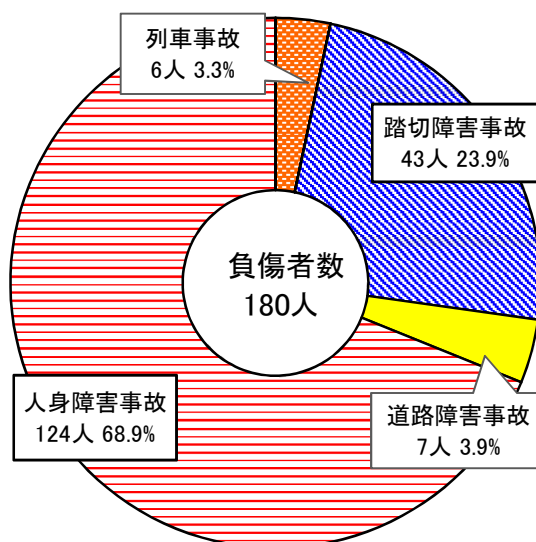
②死傷者数



③ 死亡者数



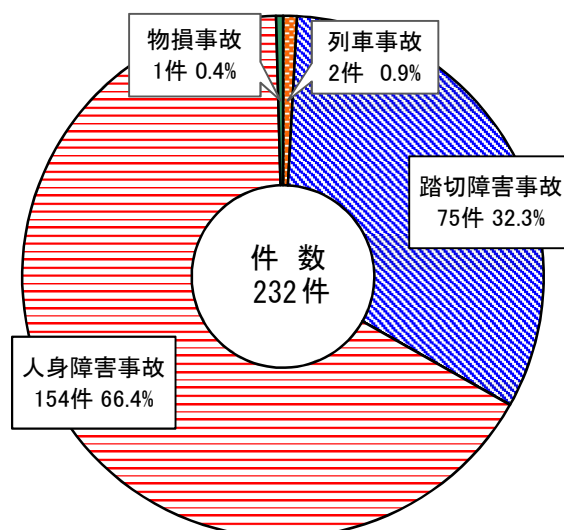
④ 負傷者数



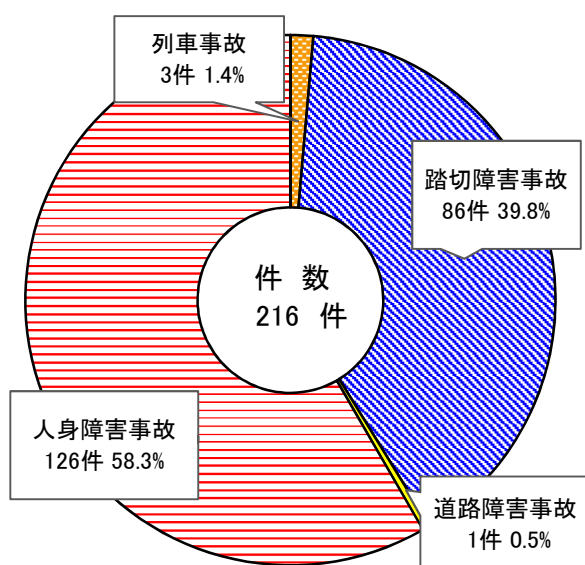
⑤ JR(新幹線)の件数

(※運転事故はありませんでした)

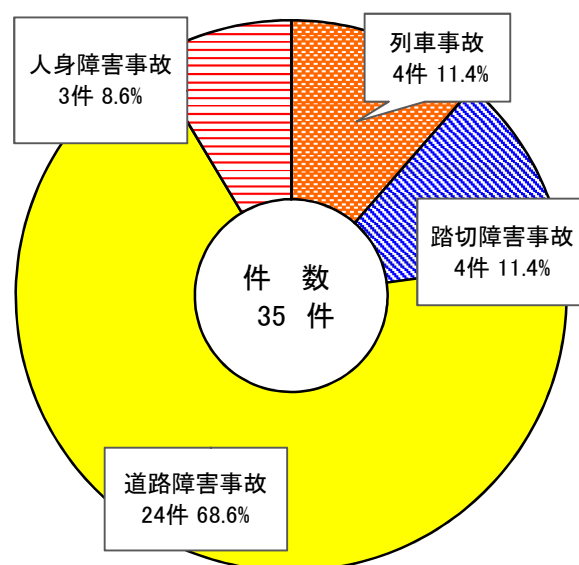
⑥JR(在来線)の件数



⑦ 民鉄等(軌道以外)の件数



⑧ 民鉄等(軌道)の件数



- (4) 令和2年度において5人以上の死傷者又は乗客、乗務員に死亡者が発生した事故
- ・令和2年度は、5人以上の死傷者又は乗客、乗務員に死亡者が発生する事故はありませんでした。

2. 2 列車事故の発生状況

- ・令和2年度に発生した列車事故の件数は、運転事故全体の1. 9%に当たる9件(対前年度比6件減)であり、その内訳は列車衝突事故が3件(列車事故に占める割合33. 3%、対前年度比1件増)、列車脱線事故が6件(同66. 7%、同7件減)、列車火災事故が0件(同0%、同増減無し)でした。
- ・令和2年度に発生した列車事故による死傷者数は6人(運転事故に占める割合1. 4%、対前年度比85人減)であり、その内訳は列車衝突事故によるものが4人(列車事故に占める割合66. 7%、対前年度比2人減)、列車脱線事故によるものが2人(同33. 3%、同83人減)、列車火災事故によるものは0人(同0%、同増減無し)でした。
- ・なお、令和2年度に発生した列車事故による死亡者数は0人(運転事故に占める割合0%、対前年度比2人減)でした。

図8： 列車事故の件数及び死傷者数の推移

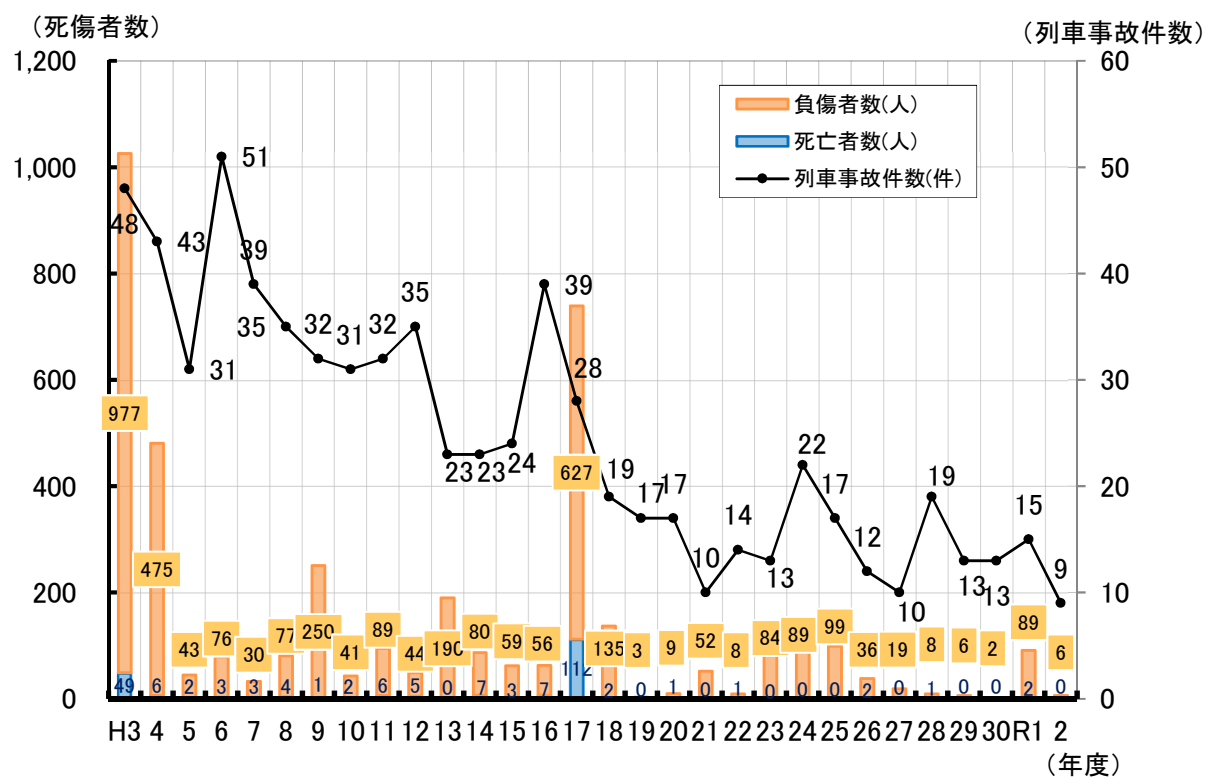
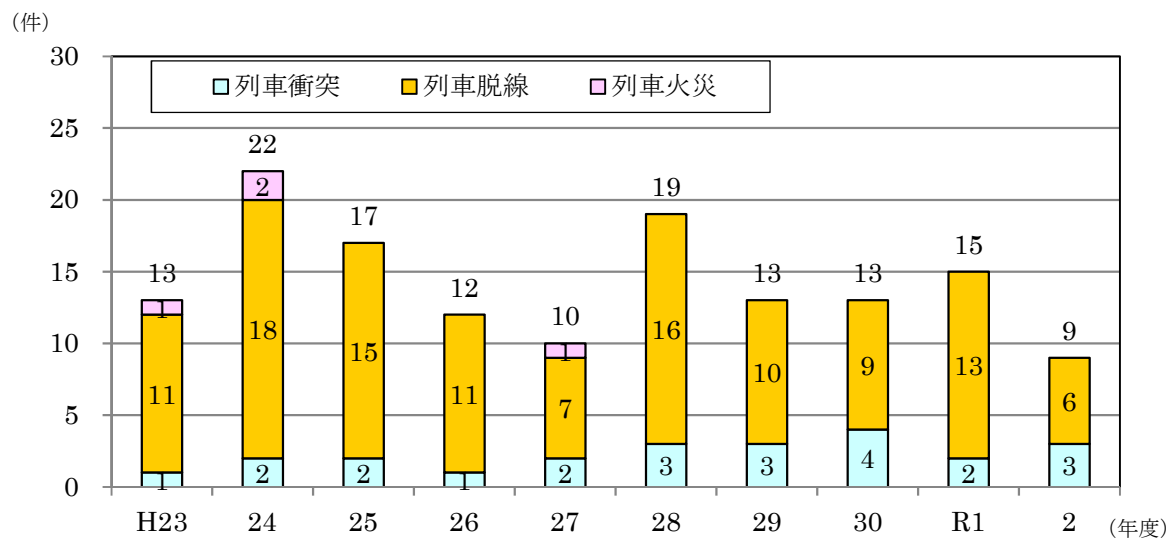


図9：列車事故の件数の内訳(過去10年間)



2. 3 踏切事故の発生状況

(1) 踏切事故の件数及び死傷者数の推移等

- ・令和2年度に発生した踏切事故の件数は、運転事故全体の34.2%に当たる165件（対前年度比46件減）でした。
- ・令和2年度に発生した踏切事故のうち、身体障害者が関わる事故の件数は1件（踏切事故に占める割合0.6%、対前年度比増減無し）でした。なお、その1件は、第1種踏切道における下肢障害者が関わる事故でした。
- ・令和2年度に発生した踏切事故による死傷者数は117人（運転事故に占める割合28.1%、対前年度比99人減）であり、うち死者数は74人（同31.4%、同10人減）でした。

図10： 踏切事故の件数及び死傷者数の推移

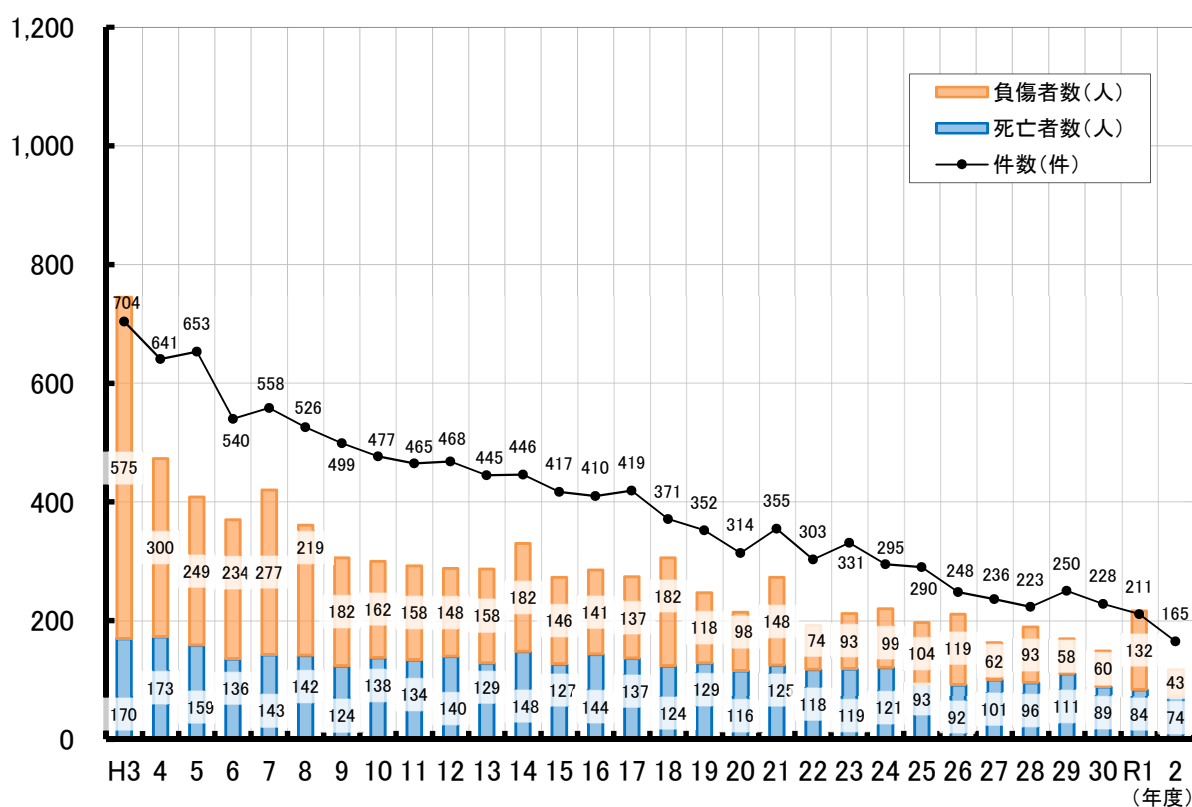
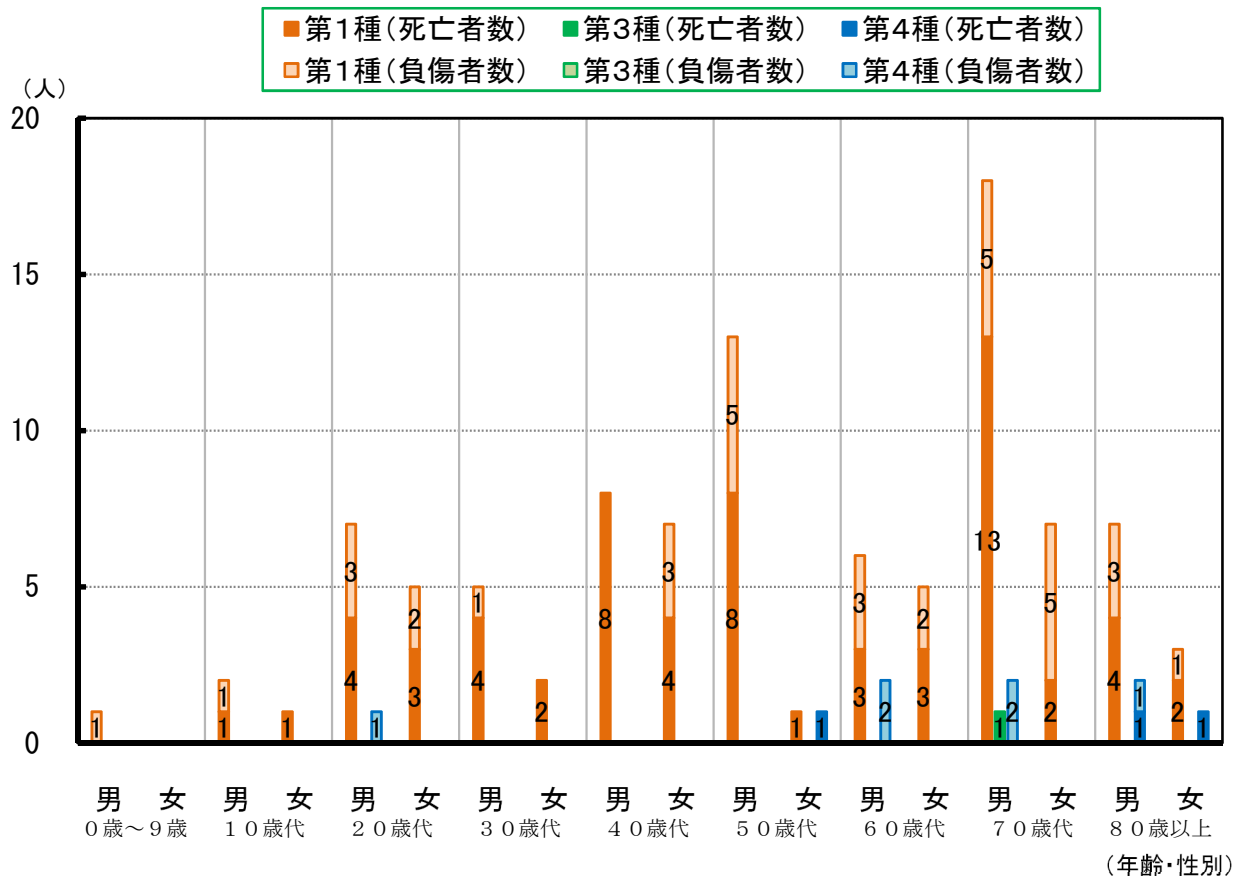


図11:踏切事故による死傷者数の年齢別人数(令和2年度)

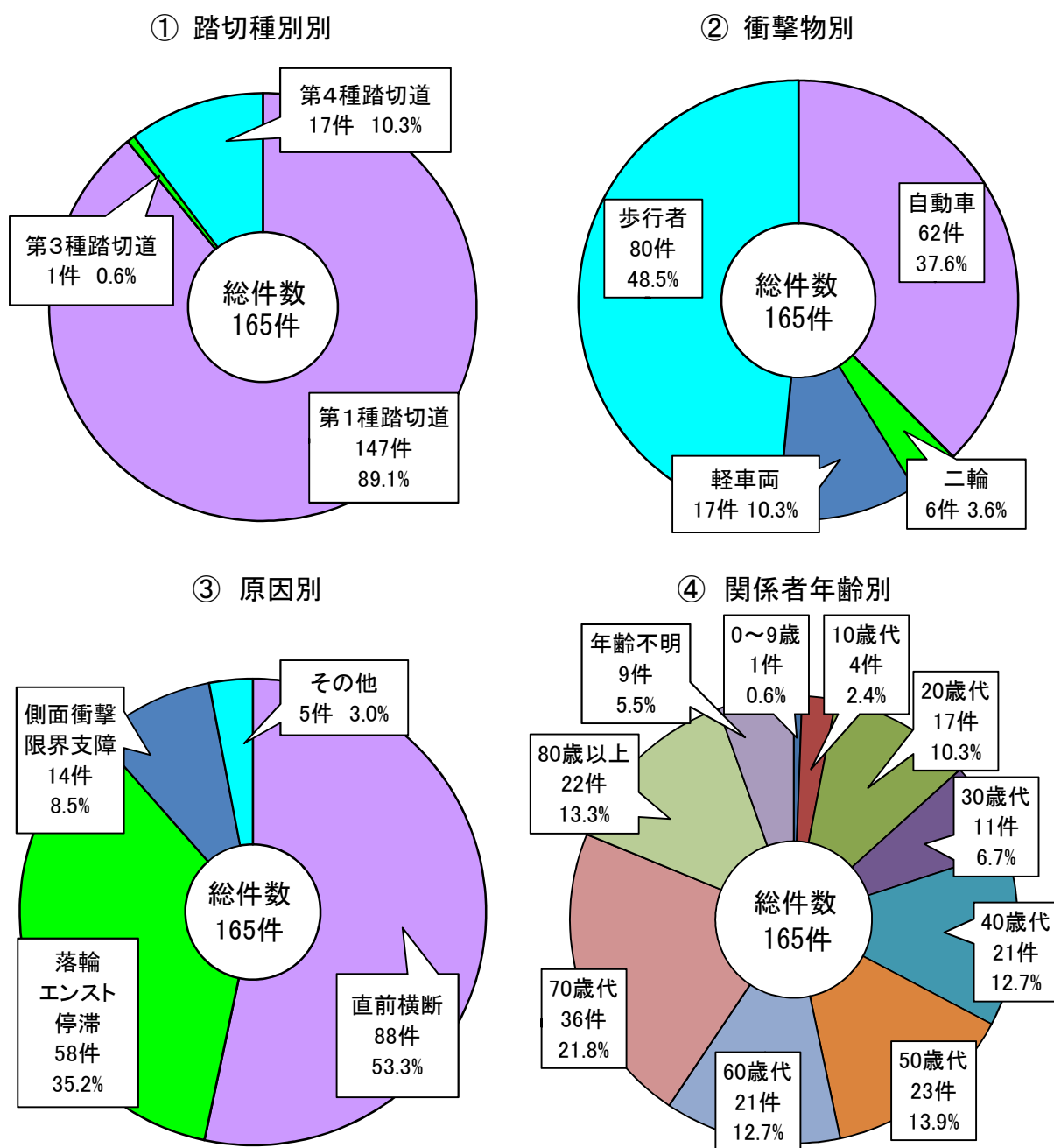


- ※ 自動車等の運転者、歩行者が列車と接触し、死傷した人数を計上しております(列車の乗客等を除く)。
 ※ 高齢者(65歳以上)が関わる踏切事故の内訳は、「第1種踏切道における死傷者数は40人、うち死亡者数は23人」、「第3種踏切道における死傷者数は1人、うち死亡者数は1人」、「第4種踏切道における死傷者数は7人、うち死亡者数は2人」です(年齢の把握ができなかった場合は、除く)。

(2) 踏切種別別・衝撃物別及び原因別の踏切事故の件数

- ・令和2年度に発生した踏切事故の踏切種別別の内訳は、第1種踏切道147件(踏切事故に占める割合89.1%、対前年度比29件減)、第3種踏切道1件(同0.6%、同5件減)、第4種踏切道17件(同10.3%、同12件減)でした。
- ・衝撃物別の内訳は、自動車62件(踏切事故に占める割合37.6%、対前年度比29件減)、二輪6件(同3.6%、同2件増)、自転車などの軽車両17件(同10.3%、同10件減)、歩行者80件(同48.5%、同9件減)でした。
- ・原因別の内訳は、直前横断88件(踏切事故に占める割合53.3%、同20件減)、落輪・エンスト・停滞58件(同35.2%、同7件減)、側面衝撃・限界支障14件(同8.5%、同14件減)、その他5件(同3.0%、同5件減)でした。

図12：踏切種別別、衝撃物別、原因別及び関係者年齢別の踏切事故の件数(令和2年度)



※高齢者(65歳以上)の件数は、69件

直 前 横 断：踏切道において、列車又は車両(以下「列車等」という。)が接近しているにもかかわらず、踏切道を通行しようとする自動車、二輪・原動付自転車又は軽車両等(以下「自動車等」という。)若しくは人が、無理に又は不注意に踏切道内に進入したため列車等と衝突したもの

落輪・エンスト・停滞：自動車等が落輪、エンスト、交通渋滞、自動車の運転操作の誤り等により、踏切道から進退が不可能となったため列車等と衝突したもの

側面衝撃・限界支障：自動車等が通過中の列車等の側面に接触したもの及び人等が踏切道の手前で停止した位置が不適切であったために列車等と衝突したもの

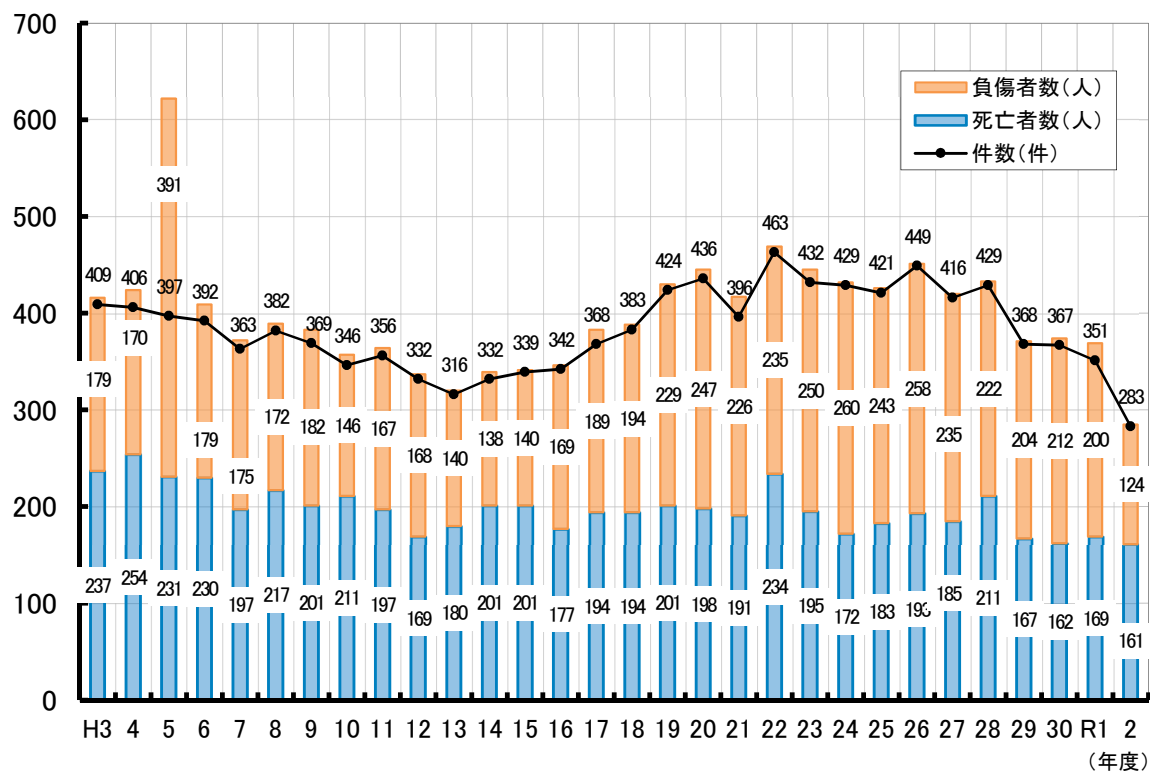
関係者年齢：関係者年齢とは、歩行者等の年齢(自動車等にあつては、運転者の年齢)

2. 4 人身障害事故の発生状況

(1) 人身障害事故の件数及び死傷者数の推移等

- ・令和2年度に発生した人身障害事故の件数は、運転事故全体の58.6%に当たる283件(対前年度比68件減)でした。
- ・令和2年度に発生した人身障害事故のうち、身体障害者が関わる事故の件数は3件(人身障害事故に占める割合1.0%、対前年度比3件減)であり、いずれも視覚障害者が関わる事故でした。
- ・新幹線に関わる人身障害事故の件数は0件(人身障害事故に占める割合0%、対前年度比増減無し)でした。
- ・なお、令和2年度に発生した人身障害事故による死傷者数は285人(運転事故に占める割合68.5%、対前年度比84人減)、うち死亡者数は161人(同68.2%、同8人減)でした。

図13：人身障害事故の件数及び死傷者数の推移



(2) 原因別の人身障害事故の件数等

・原因別の内訳は、次のとおりです。

①「公衆等が無断で線路内に立ち入る等により列車等と接触したもの（線路内立入り等での接触）」が181件（人身障害事故に占める割合64.0%、対前年度比1件増）であり、これによる死傷者数は183人（同64.2%、同1人増）、うち死亡者数は143人（同88.8%、同9人増）でした。

②「旅客がプラットフォームから転落したことにより列車等と接触したもの（ホームから転落して接触）」が32件（同11.3%、同6件減）、これによる死傷者数は32人（同11.2%、同6人減）、うち死亡者数は15人（同9.3%、同9人減）でした。

③「プラットフォーム上で列車等と接触したもの（ホーム上で接触）」が66件（同23.3%、同56件減）、これによる死傷者数は66人（同23.2%、同56人減）、うち死亡者数は2人（同1.2%、同8人減）でした。

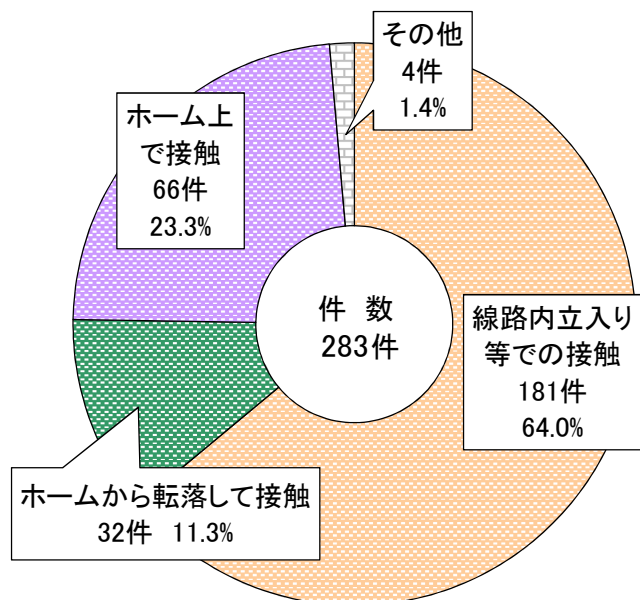
・令和2年度は、上記②（旅客がプラットフォームから転落したことにより列車等と接触したもの）及び③（プラットフォーム上で列車等と接触したもの）の人身障害事故が98件（対前年度比62件減、38.8%減）と大幅に減少しており、新型コロナウイルス感染症の感染拡大に伴う利用者数の減少も影響していると考えられます。

・令和2年度に発生した人身障害事故のうち、身体障害者が関わる事故の原因別の内訳は、「旅客がプラットフォームから転落したことにより列車等と接触したもの（ホームから転落して接触）」が3件であり、これによる死傷者数は3人、うち死亡者数は3人でした。なお、いずれの事故も視覚障害者が関わる事故でした。

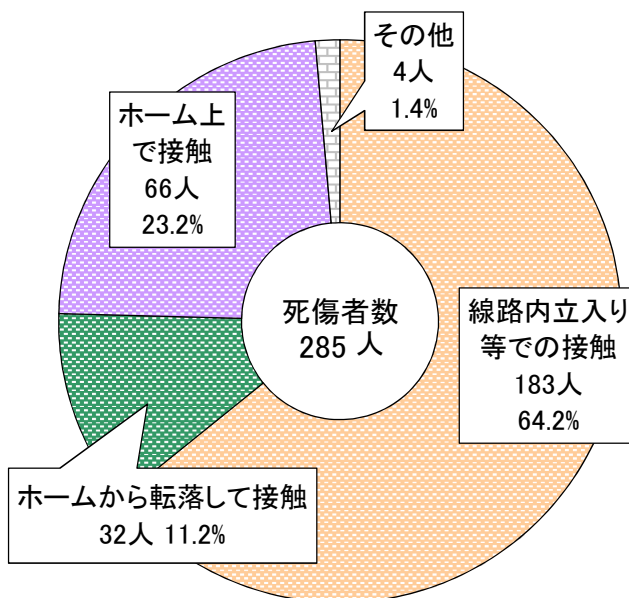
・その他、設備の故障、鉄道係員の作業誤り等によるものは4件（人身障害事故に占める割合1.4%、対前年度比7件減）、これによる死傷者数は4人（同1.4%、同23人減）、うち死亡者数は1人（同0.6%、同増減無し）でした。

図14：人身障害事故の原因別の件数及び死傷者数(令和2年度)

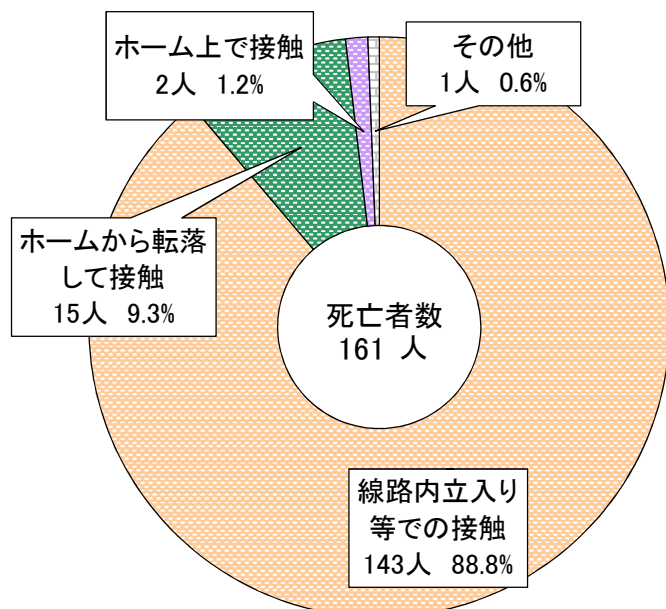
① 件 数



② 死傷者数



③ 死亡者数



④ 負傷者数

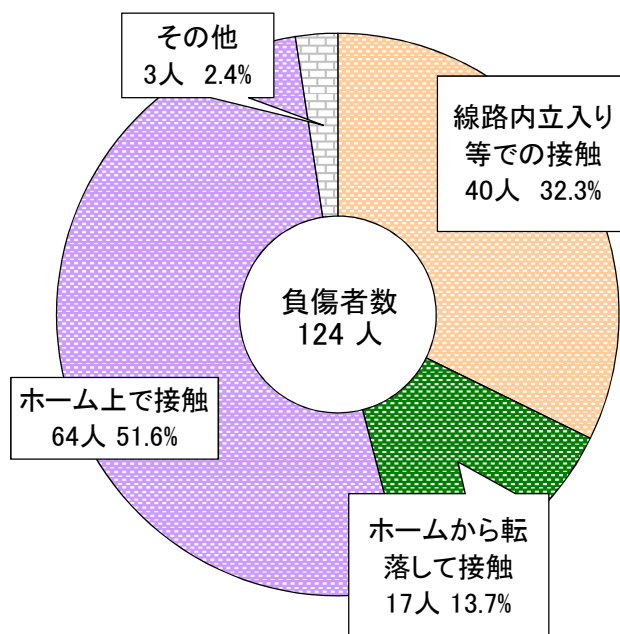


図15: 人身障害事故の原因別件数の推移

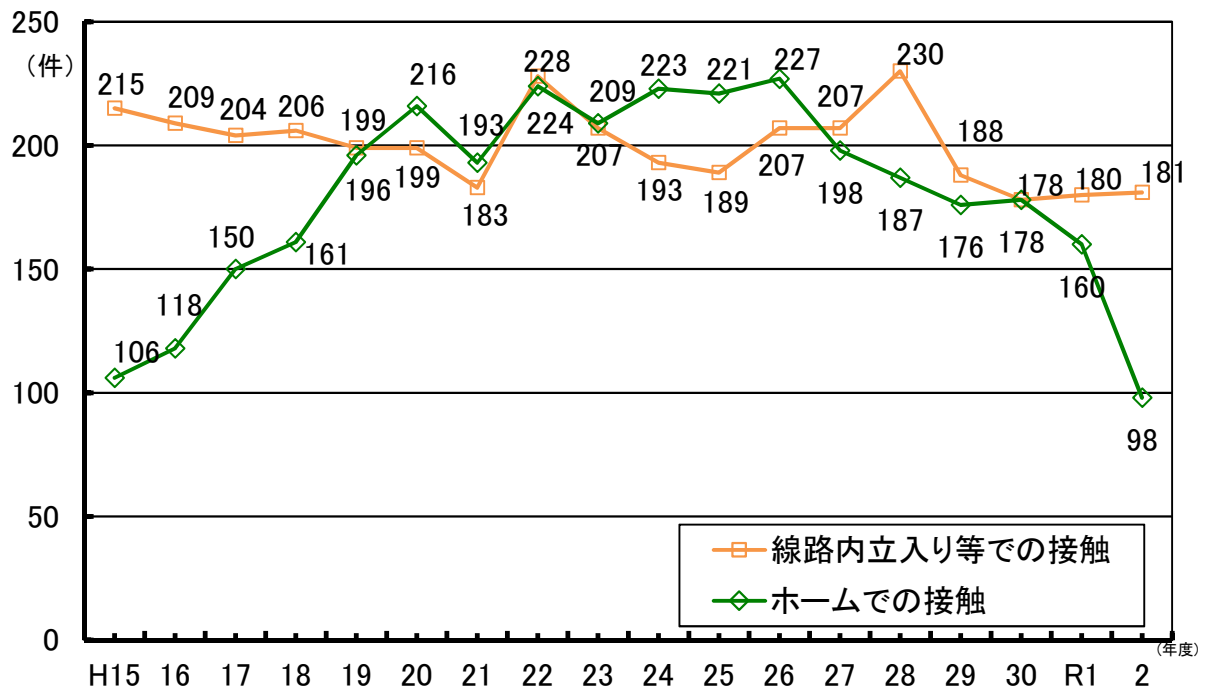
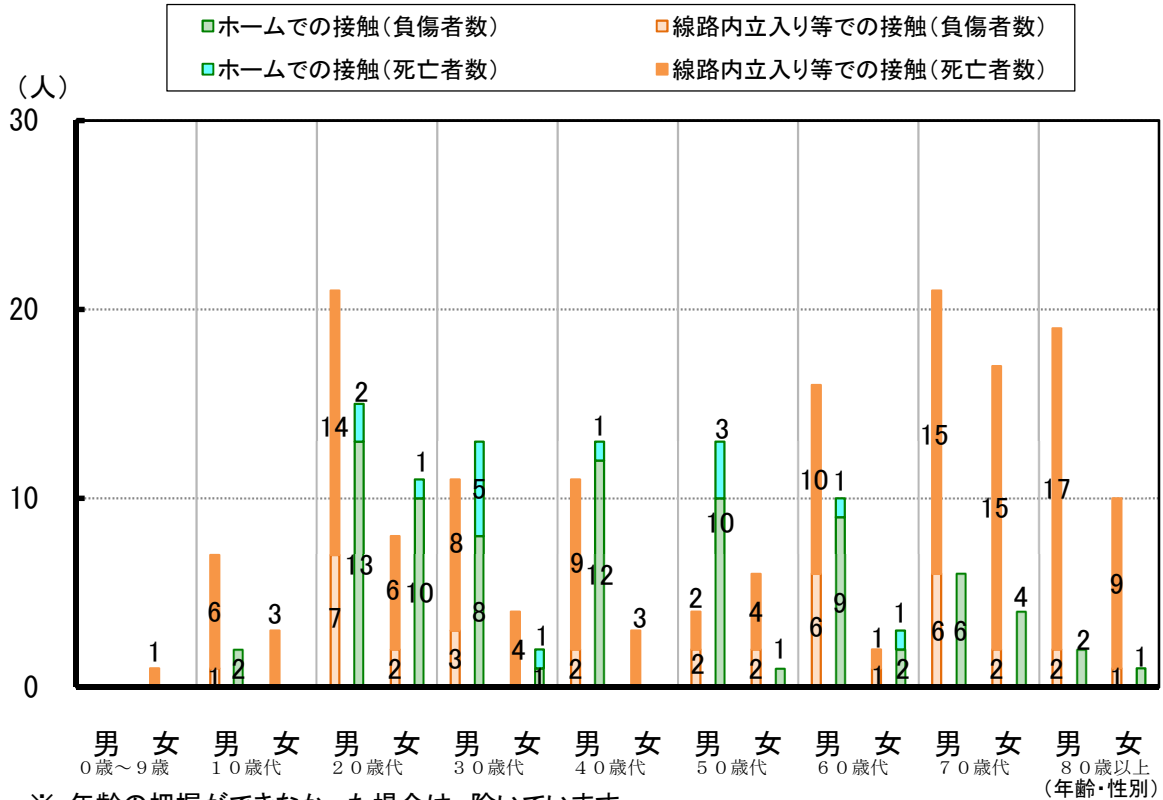


図16: 人身障害事故による死傷者数の年齢別人数(令和2年度)



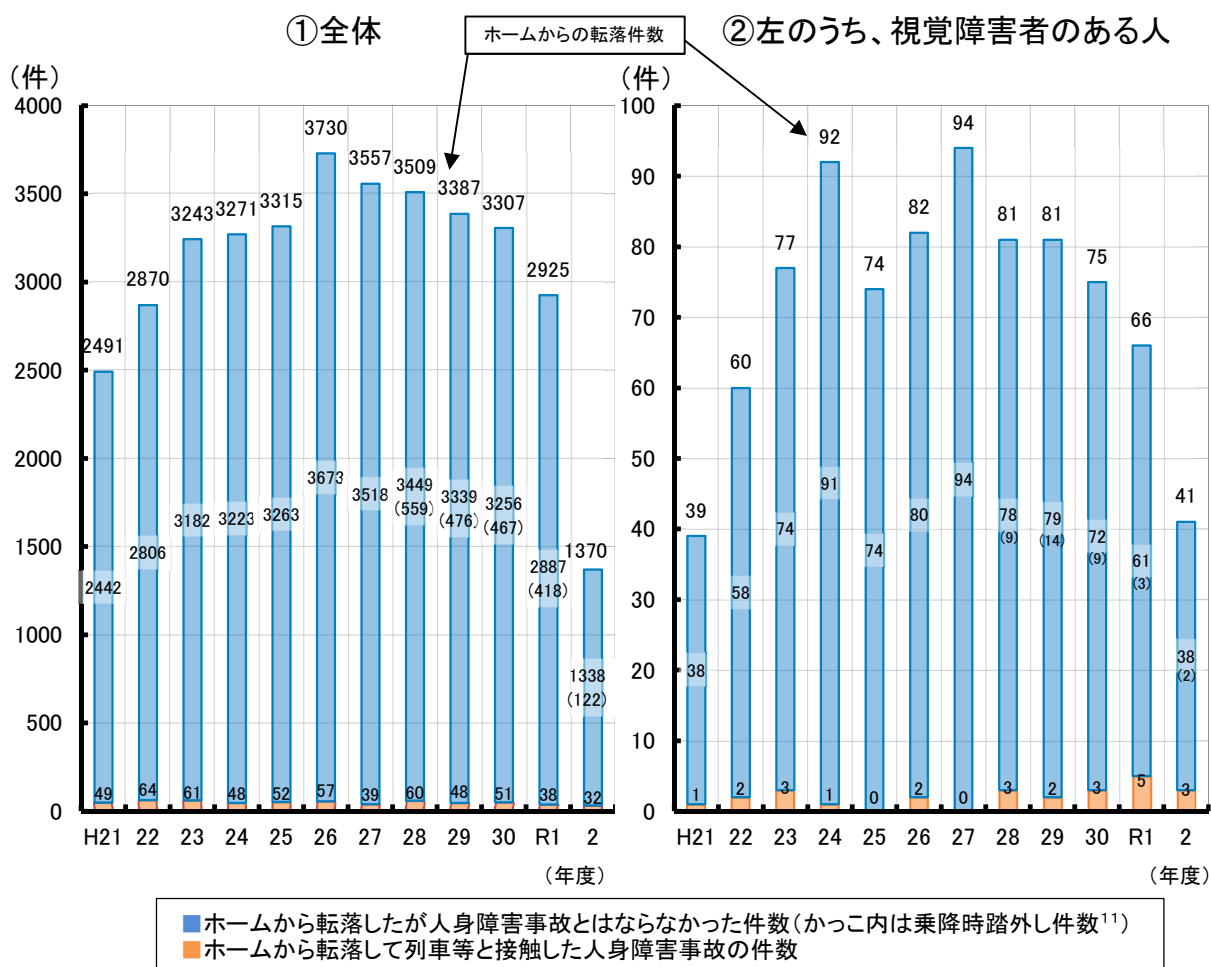
※ 年齢の把握ができなかった場合は、除いています。

※ 高齢者(65歳以上)については、ホームでの接触による死傷者数は17人、うち死亡者数は2人、線路内立入り等での接触による死傷者数は72人、うち死亡者数は58人です。

(3) 駅ホームからの転落に関する状況

- ・令和2年度におけるホームからの転落件数⁹は 1,370件で、このうち視覚障害のある人の件数は41件でした。また、ホームから転落して列車等と接触した人身障害事故¹⁰の件数は32件で、このうち視覚障害のある人の件数は3件でした。
- ・また、令和2年度は、新型コロナウイルスの感染拡大に伴う鉄道の利用者数の減少により、転落件数も大幅に減少していると考えられます。

図17:ホームからの転落件数等の推移



※ ホームからの転落件数は、鉄軌道事業者が把握している件数です。

⁹ ホームからの転落件数は、ホームから転落したが人身障害事故とはならなかった件数とホームから転落して列車等と接触した人身障害事故の件数です(令和2年度公表分からホーム上での接触事故件数を除く集計方法となりましたので、ご注意ください)。また、自殺等、故意にホームから線路に降りたものは含まれません。

¹⁰ 自殺等故意に列車等に接触したものは含まれません。

¹¹ 従来より、ホームからの転落件数には乗降時に足を踏み外して列車とホームの間に挟まった件数も含まれていましたが、平成28年度から、これを「乗降時踏み外し」として()内に転落件数の内数として記載しています。

表3：ホームからの転落（人身障害事故になったものを除く）の要因別件数の推移

（件）

年度 要因	H22	H23	H24	H25	H26	H27	H28	H29	H30	R1	R2
酔客	1613 (57.5%)	1832 (57.6%)	1845 (57.2%)	1959 (60.0%)	2070 (56.4%)	1979 (56.3%)	1822 (52.8%)	1936 (58.0%)	1779 (54.6%)	1565 (54.2%)	720 (53.8%)
体調不良	185 (6.6%)	195 (6.1%)	169 (5.2%)	177 (5.4%)	206 (5.6%)	168 (4.8%)	252 (7.3%)	227 (6.8%)	223 (6.8%)	212 (7.3%)	122 (9.1%)
携帯電話 使用	10 (0.4%)	17 (0.5%)	19 (0.6%)	44 (1.3%)	32 (0.9%)	42 (1.2%)	34 (1.0%)	49 (1.5%)	53 (1.6%)	45 (1.6%)	29 (2.2%)
旅客 トラブル	17 (0.6%)	21 (0.7%)	30 (0.9%)	11 (0.3%)	26 (0.7%)	12 (0.3%)	19 (0.6%)	33 (1.0%)	17 (0.5%)	26 (0.9%)	9 (0.7%)
原因不明 等	981 (35.0%)	1117 (35.1%)	1160 (36.0%)	1072 (32.9%)	1339 (36.5%)	1317 (37.4%)	1322 (38.3%)	1094 (32.8%)	1184 (36.4%)	1039 (36.0%)	458 (34.2%)
合 計	2806	3182	3223	3263	3673	3518	3449	3339	3256	2887	1338

※ ホームからの転落要因は、鉄軌道事業者が把握している件数です。